

国際交流 ニュースレター

合作弁学プログラム特集号

No. 7

国際交流委員会・合作弁学実施委員会

平成 20 年（2008 年）11 月 12 日発行

Website: <http://international.edu.mie-u.ac.jp/index.html>

目次

天津便り（特集：合作弁学プログラム）

- 天津師範大学 50 周年記念大会での熱烈的な歓迎とダブル・ディグリーへの大きな期待

三重大学学長 豊田長康

- 短期派遣教員報告

- “社会旅行へのゲート”で過ごした 2 週間

国語教育講座講師 林 朝子

- 「おかげさまで」の日本語講義

社会科教育講座教授 秋元ひろと

- 三重大学と天津師範大学とのプロジェクトとは？

- 【コラム】天津師範大学との合作弁学事業の彼方

三重大学理事（副学長） 東 晋次

- 天津師範大学附属中学（天津市実験中学）創立 85 周年記念式典・事業に参加して

教育学部附属中学校長 山根栄次

海外出張報告

- UNCW 出張報告

国際交流委員 早瀬光秋・宮地信弘

外国人研究者

- 中国における英語教育の現状

外国人研究者 李遠方（河南師範大学助教授）

留学生便り

- My Life and Study in UNCW

英語教育コース 4 年 川北佑奈

- 南開大学留学記

三重大学教育学部卒業生 高橋 愛

- 河南師範大学交換留学生来学

学生海外活動

- 第 15 回 3 大学国際ジョイントセミナー&シンポジウム開催



UNCW (University of North Carolina at Wilmington)



国際交流
ニュースレター
Newsletter

9月6～8日、天津師範大学の50周年記念大会に参加しました。東晋次、小林英雄の両副学長、山田康彦教育学部長、王秀崑生物資源学部教授と共に天津に着くと、当地で教鞭をとっておられる伊藤彰勇先生、佐藤廣和先生、林朝子先生の出迎えを受けました。市街地にある八里台のキャンパスで、王延文副学長と国際教育交流学院の鐘英華学院長の出迎えを受け、そして2年前にダブル・ディグリー方式による日本語コースの第一期生入学式に出席した時につきっきりでお世話をいただいた田園先生と楊薇先生に今回もお世話になりました。

まず公務委員会主任の李家祥教授が歓迎の挨拶にこられ、両校の交流の拡大を強く希望されました。また、学生募集担当の高福成さんのご努力もあって、今年の新入生は前回よりも競争が激しくなり、いっそう優秀な学生が集まったとのことでした。

天津師範大学内のホテルのレストランでの夕食会では、学長の高玉葆さんの歓迎を受けました。今回は、カナダ、英国、米国、ドイツ、ケニア、タイ、韓国、日本の8カ国から10大学の学長や副学長が参加しました。

7日の朝、郊外の広大な敷地にある新キャンパスで、今回三重大学が寄贈した桜の苗木50本の植樹式が執り行われました。日本語コース第一期生が見守る中で、高学長と私が挨拶をした後「桜庭園」の文字が刻まれた標石が除幕されました。その字は私が東先生のご指導もいただきつつ百枚ほどの練習をして書いた

もので、字が下手なことにコンプレックスを抱いている私としては、なんとか体裁を保っていると胸をなでおろしました。

天津市の副市長など天津師範大学の有力な同窓生が多数列席された50周年祝慶大会に出席した後、今回一同に会した世界の11の大学間で相互に教育・研究や人的交流を進めようという確認書(Letter of Intent)にサインをする式典がありました。各大学の代表者が円形に座り、サインをしては移動するという形でテーブルを一周して11の確認書を完成させました。

午後、八里台のキャンパスで開催された各大学の学長等によるフォーラムでは、グローバル化が進む中での教育の取り組みについて各大学から発表がありました。私は「グローバル化における教育戦略」という題目で、主要国の中で日本の留学生数だけが停滞している理由、グローバル化の波に乗り遅れているという日本政府の危機感と留学生30万人計画、そして三重大学の今後の国際戦略について説明発表しました。

夕食の後、新キャンパスの陸上競技場で開催された50周年祝慶公演に参加しましたが、来賓、教職員、学生など約1万人が集まりました。フィールド中央に設けられた野外ステージで学生、卒業生、先生たちが次から次へと繰り広げる質の高い歌や踊りの華やかなショーに、スーパースターの野外ライブさながらに大観衆は最高潮に盛り上がりました。

私の出番は、ショーの途中ステージの

中央に出て、司会者に「桜の植樹をどのように感じていますか？」というインタビューに答えることでした。50周年記念に50本の桜を植えたこと、桜の木は天津師範大学と三重大学の友好交流が末長く続く証であることなどを、王先生の通訳を通して話しました。私の一言ひとことに、学生たちから拍手や歓声が起こり、特に、ダブル・ディグリーの日本語コースの学生さんがこの桜の花が咲くころに三重大学に来ることを述べた時には、一種のどよめきが起こりました。

8日の朝、一期生が受けている日本語の授業中に挨拶をさせていただきました。学生たちが三重大学に大きな期待を抱いていることが伝わってきました。

天津師範大学とのダブル・ディグリーによる日本語(教育)コース(括弧内は三重大学側のコース名)が、今後の三重大学あるいは日本全体の大学国際化戦略においてモデルになり得る最も有望な方式の一つであることを強く確信した訪問でした。いよいよ来年から一期生が期待に胸を膨らませて三重大学に来ますが、教育学部だけではなく全学的にもこの取り組みを重視し、彼らが失望しないような質の高い教育プログラムと、学生たちの立場に立ったお世話をする必要があると思います。これまで天津師範大学との交流の促進のために熱心に、また、地道に取り組んでいただいた教育学部の多くの先生方に心から感謝をいたしますとともに、これからも日本語(教育)コースの成功のために多くの先生方のご協力をお願いいたします。



華麗な盛り上がりを見せた天津師範大学50周年記念式典。↑

← 豊田学長直筆による「桜庭園」の文字が刻まれた標石。その前で天津師範大学日本語コースの学生たちと記念撮影。

短期派遣教員報告

“社会旅行へのゲート”で過ごした2週間

国語教育講座 講師 林 朝子

8月31日から9月14日までの2週間、天津師範大学に2度目の訪問をしました。今回は、来年4月に三重大留学を控えた3年生に対する「日本語表現」の集中講義のためです。

半年前に訪れたときに比べると、天津は非常に美しく変わっていました。北京オリンピックに向けての開発が進んだのでしょう。空港も新しく建築され、町中の道路も舗装が直されていました。そして、何と言っても前回と違うのは「澄んだ空気」です。学生によると、「澄んだ空気は後2週間ぐらいです。北京の交通規制が終われば、また曇り空です。」とのことでしたが…。

授業の方は、3時間の授業を6回行いました。「日本語表現」は三重大でも開講していますが、書く量が多いので、学生には人気薄な科目です。今回は初めて天師大の学生に教え、しかも、集中講義という形式だったため、書く内容・量・フィードバックなどをどの程度まで盛り込むことができるのか不安なまま授業を始めました。何より心配だったのが、「書くことに対する意欲」でした。しかし、これは杞憂に終わりました。皆、自分の考えていること・思っていることを何とか文章にし、相手に伝えたいという強い気持ちを持って授業に臨んでいました。学生達自ら進んで宿題用に課題がほしいとも言ってきました。ただ、彼らの「聞く・話す・読む」能力と「書く」能力にはまだ大きな差があります。これは語学学習において仕方ないことではありますが、来年、三重大で学部学生と共に学習するにはまだまだ努力を要するでしょう。しかし、真摯に日本語学習に向かう姿を見て、留学までの半年で更に「書く」能力も伸ばしてくれてくれるはずだと思っています。

タイトルに入れた“社会旅行へのゲート”という表現は、学生が作った天師大のキャッチコピーです。授業中の気分転換に天師大のキャッチコピーを学生に作ってもらったのですが、天師大で学ぶことが素晴らしい未来へつながるという内容がほとんどでした。三重大も彼らの未来へつながる“ゲート”の一つになることを祈ります。



放課後、夜遅くまで自習する学生たち。



パンケーキで中秋の名月のお祝い。

「おかげさまで」の日本語講義

社会科教育講座 教授 秋元ひろと



できるかな？難しい問題に取り組む学生。↑
学生たちと。印象的な朗らかな笑顔。↓

9月21日から10月5日までの15日間、天津師範大学に出張して集中講義を行ってきました。私にとっては2度目の天津、学生たちとも1年半ぶりの再会でした。

私が担当した講義は「日本語と論理的表現」。三重大では、日本語教育コースの発足に合わせて新設した授業科目です。一般論とその具体例、論点の提示とその敷衍や要約、理由と帰結などの文と文の関係を的確に捉えて表現し、論理的に文章を展開するスキルを身につけることをおまな内容としています。日本語を学び始めて3年目に入って間もない学生たちには少し難しいのではないかと心配もしていました。しかし、学生たちの日本語能力の上達には目を見張るものがあり、そうした心配は取り越し苦労に終わりました。彼らが日本語学習に傾けてきた努力と、それを支えてこられた天師大側のスタッフ、これまでの長期・短期派遣教員をはじめとする三重大側のスタッフのおかげと言うほかありません。とてもよい時期に集中講義を担当することができたと感謝しています。もっとも、私自身はと言えば、これ



までの天津プロジェクトの成果を実感させて頂くばかりで、学生たちに対してけっして十分なことができたという訳ではありません。来年4月に来日する彼らが三重大で充実した留学生活を送るの一助になればとただ願うばかりです。

三重大と天津師範大学とのプロジェクトとは？

【ダブル・ディグリー制度と合作併学制度】

ダブル・ディグリー制度（共同学位制度）とは、学生が外国の大学と一定期間お互いを行き来して両方の学位を取得できる制度のことです。中央教育審議会の資料中では、国内の大学の学生が外国の大学に一定期間滞りながら外国の大学の学位も取得するだけの場合を「派遣型」、その逆を「受入型」、そして三重大と天津師範大学のように双方向の場合を「受入派遣型」と呼称しています。但し、三重大では受入側の整備を一步先んじる形で進めてきています。

中国では合作併学条例を2003年3月に発布しており、国内と国外の高等教育機関が協同で学校や各種コースを設けることを「合作併学」と称しています。この条例に従って三重大と天津師範大学とが、日本語教育コースにおいてダブル・ディグリー制度を実施しようとする事業が「合作併学事業」（または天津プロジェクト）と呼ばれているものです。

三重大と天津師範大学はこの条例に基づき、ダブル・ディグリー制度を整備し、合作併学事業としての申請を行い、認可を受けるべく、その準備を進めてきました。2006年9月から国際教育交流学院に定員20名の日本語実験班というコースを設けて学生を受け入れています。ここで「実験班」というのは日本語の実験的コースという意味に加えて「先進モデルコース」といった意味合いを持っているようです（参考までに書きますと、三重大教育学部附属中学校と交流を深めている「天津師範大学附属中学」は「天津市実験中学」という別名を持っていて、先進的な教育を進めています）。

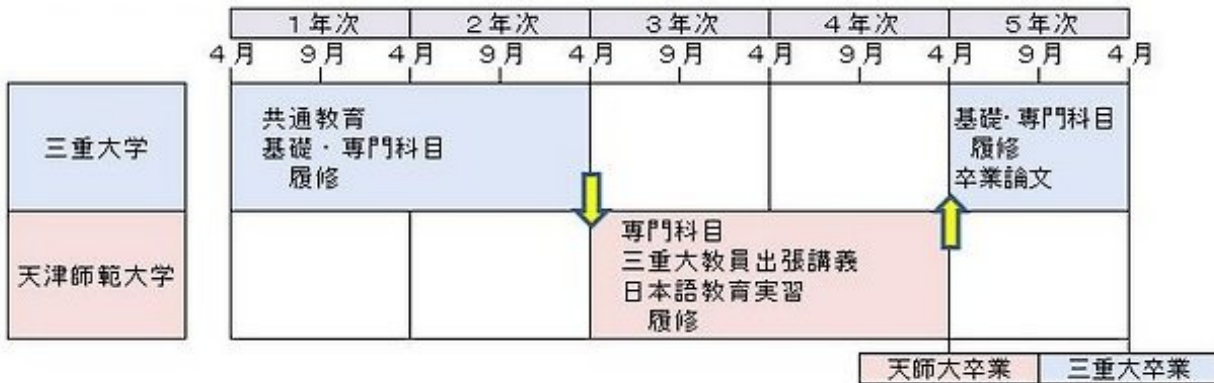
実験班の発足と同時に、合作併学の申請を天津市教育委員会に打診しておりましたが、国家教育部が、折悪しく全国各地で巻き起こっていた学位授与問題をめぐる紛争などの対応に追われており、合作併学の審査そのものが停滞しておりましたので、ひとまず実績を積み重ねることにした経緯があります。かくして、2年間の実績も含めて準備が整い、2008年10月末に両大学で書類を整えて申請を行い、現在審査中です。今年度中にはその結果が出る見込みであり、可能性は高いとの天津師範大学関係者の話です。

三重大教育学部においても2006年4月から定員10名の日本語教育コースを設けて学生を受け入れています。このコースは「国際的教育的場に携わる人材を養成しようという目的」（コース紹介より）を持ったものですが、天津師範大学からの学生を受け入れる、あるいは天津師範大学に赴くコースといった側面も併せ持っています。

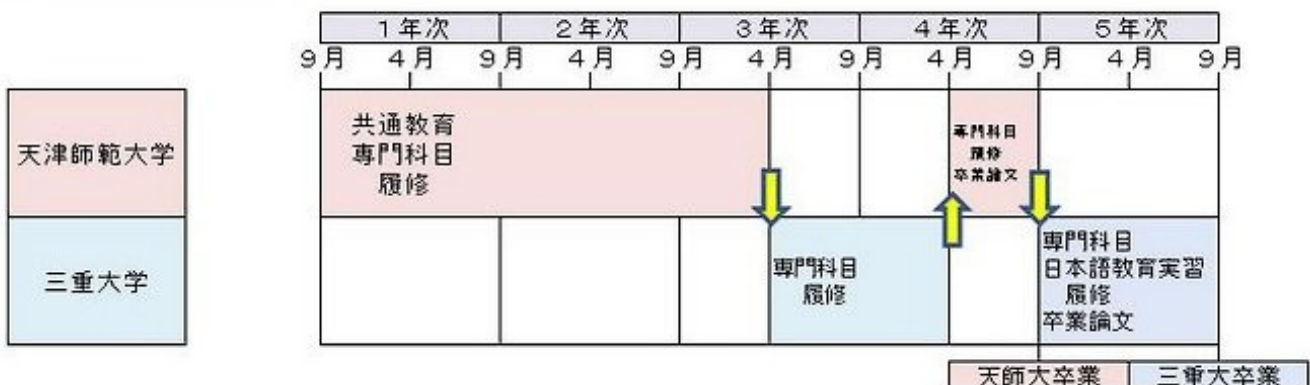
三重大教育学部においても2006年4月から定員10名の日本語教育コースを設けて学生を受け入れています。このコースは「国際的教育的場に携わる人材を養成しようという目的」（コース紹介より）を持ったものですが、天津師範大学からの学生を受け入れる、あるいは天津師範大学に赴くコースといった側面も併せ持っています。

【天津師範大学とのダブル・ディグリー制度の仕組み】

三重大学生の場合



天津師範大学生の場合



図はダブル・ディグリー制度に伴う両大学間の学生の動きです。三重大学生の場合は2年次終了時に天津師範大学に移動し、2年間学びます。こうして4年を経た時点で天津師範大学を卒業、学位が取得でき、その後三重大学に戻って1年間学ぶことにより三重大学を卒業、三重大学の学位も取得できます。天津師範大学生の場合は2年半天津師範大学で学んだ後三重大学に移動し、1年間学びます。その後半年間天津師範大学に戻り、天津師範大学を卒業、学位を取得します。その後再び三重大学に移動し、1年間学ぶことにより三重大学を卒業、三重大学の学位も取得できます。また天津師範大学生にはこの他、三重大学において取得した単位に応じ「日本語教育標準科目履修修了

証」、「日本語教育コース修了証」を発行します。

両大学の学位を取得する関係上、相手大学滞在中、学生は両大学に対して授業料を支払う必要があります。三重大学生が天津師範大学に支払う授業料は、天津師範大学の留学生の授業料と生活費の基準により支払います。一方、天津師範大学生が三重大学に支払う授業料は、天津師範大学で定めた授業料基準による額(現行4千元)を支払います。現在中国の国家教育部に申請中ですが、合作弁学事業として認可された際には、申請予定授業料1万6千元(約24万円)が三重大学にも納付されることになり、三重大学生が天津師範大学に納付する額とほぼ同額になります。

【天津師範大学とのダブル・ディグリー制度の特徴と意義】

天津師範大学との交流は教員個人の交流から始まり、2003年3月に学部レベルで学術協力・交流に関する一般協定が締結されました。2004年11月にはこれが大学レベルの協定に変更されました。この大学レベルの協定の元に2006年6月に「三重大学と天津師範大学との日本語教育コース協同教育に関する覚書」が交わされました。両大学のダブル・ディグリー制度の基本的事項はすべてこの覚書に書かれており、これに基づき両大学でこのプロジェクトを実際化してきています。

天津師範大学とのダブル・ディグリー制度で特徴的なのは、三重大学の教員が常時2名天津師範大学に滞在し日本語指導を行うこと、またこれ以外にも短期間滞在し、年間で16単位分を指導するシステムにしていることです。これにより、日本語を学ぶ天津師範大学の学生は三重大学に来る前の段階から日本語及び日本について複数の日本語ネイティブから直接学ぶことができます。

この制度が軌道に乗りますと、天津師範大学の学生一学年20名が2学年、常時40名が三重大学教育学部に滞在することとなります。これは一学年200名の三重大学教育学部生にとって少なくない人数で、三重大学教育学部生にあってはいながらにして異文化を学ぶ機会となるでしょう。学校現場にあっては様々な母語を持つ子どもたちが同じ教室で学ぶことがむしろ普通になってきており、教員を目指す学生にあっては異文化共生教育ではなく、多文化共生教育が求められています。三重大学教育学部の受入派遣型のダブル・ディグリー制度はその仕組みの一つとして大きな意味を持つと期待されます。

このように、生物資源学部においてもインドネシアのスリービージャヤ大学とのダブル・ディグリー制度が開始されました。教育学部のみならず三重大学が全学的に、その教育や研究のノウハウを駆使し、アジアの若者を吸引する教育プログラムを用意することは、三重大学の将来にとっても大いに意義のあることだと信じます。教育学部がその先陣を切っているのです。

今後、日本語・日本文化に関する教育プログラムや教育方法を深化させ、三重大学を日本語・日本文化のアジアにおける一大教育センターとする、という壮大な夢を描くことも、あなたが無謀なことではないのではないのでしょうか。

このように、生物資源学部においてもインドネシアのスリービージャヤ大学とのダブル・ディグリー制度が開始されました。教育学部のみならず三重大学が全学的に、その教育や研究のノウハウを駆使し、アジアの若者を吸引する教育プログラムを用意することは、三重大学の将来にとっても大いに意義のあることだと信じます。教育学部がその先陣を切っているのです。

コラム

天津師範大学との合作弁学事業の彼方

三重大学理事(副学長) 東晋次

合作弁学事業に当初から関わった一人として、是非申し上げたいことがあり、一文を載せていただきました。

今年の4月に、河南師範大学訪問団が学長室を表敬訪問した際、団長の副学長から、天津師範大学との合作弁学方式をぜひ河南師範大学においても実施したい、との希望が寄せられた、と学長から聞きましたし、そのことは学長ブログにも学長所感とともに掲載されております。また、つい先日、学長が江蘇大学をはじめ南京工業大学や安徽農業大学を訪問した際、全ての大学に日本語科があり、三重大学との協同教育の要望がなされたとのことを学長から直接聞きました。

このような要望が中国のみならず、他のアジア諸国の大学にもあることは十分推測されます。中国の天津師範大学のみならず、日本語・日本文化を学ぼうとするアジアの若者に、日本の国立大学が広く門戸を開くことは、日本への理解を深め、アジアの若者の友好交流にも大きく貢献する国際戦略となり得ます。天津師範大学との合作弁学事業はその開始点であり、ぜひ成功させたいものと念じております。

このほど、生物資源学部においてもインドネシアのスリービージャヤ大学とのダブル・ディグリー制度が開始されました。教育学部のみならず三重大学が全学的に、その教育や研究のノウハウを駆使し、アジアの若者を吸引する教育プログラムを用意することは、三重大学の将来にとっても大いに意義のあることだと信じます。教育学部がその先陣を切っているのです。

今後、日本語・日本文化に関する教育プログラムや教育方法を深化させ、三重大学を日本語・日本文化のアジアにおける一大教育センターとする、という壮大な夢を描くことも、あなたが無謀なことではないのではないのでしょうか。

今号掲載の豊田学長の記事にもあるように、天津師範大学が創立50周年を迎えました。また、天津市実験中学(天津師範大学附属中学)も創立85周年を迎えました(出席された山根栄次附属中学校長の記事は次頁)。心よりお祝い申し上げます。これを機に両大学・両中学校の更なる友好関係が促進されることを祈念いたします。

(編集部)

天津師範大学
祝創立50周年
Congratulations
on
the 50th
Anniversary
of Tianjin
Normal University

天津市実験中学
祝創立85周年
Congratulations
on
the 85th
Anniversary
of Tianjin
Experimental
High School

三重大学と天津師範大学との大学間交流をうけ、それぞれの大学の附属学校である三重大学教育学部附属中学校と天津師範大学附属中学（別称・天津市实验中学。6年制の中高一貫高。現在では通常、天津市实验中学と名乗っている。張紅校長）は、3年前に交流の覚書を交わし、それ以来、着実に交流を深めている。本年は、天津師範大学附属中学創立 85 周年に当たり、それを記念して 10 月 18 日に同校を会場にしてその記念行事と第 4 回目になる国際教育フォーラムが開催された。本学からは、私と教育学部の国際交流委員である松岡守教授・学部長補佐が招待され、出席した。

18日の記念行事は、4部に分かれていた。

第 1 部は、広いキャンパスの中に設けられた特設ステージでの記念式典で、張校長の挨拶に続き、天津市教育部長の祝辞、姉妹学校代表の祝辞等が続いた。第 2 部は、同校の大講義室で開催された「課程改革と学校発展」と題された、世界の交流学校の校長による発表であった。カナダ、ニュージーランド、アメリカ、日本、中国からの発表があった。私は、“Let’s make a company”と題する、私が開発した起業家教育のプログラムと、それを 2003 年に附属中学校の総合的な学習の時間で実践した様子と結果について発表した。第 3 部は、やはり交流校であるイギリス、フランス、イタリア、ドイツ、スペイン、アイスランドの校長による、生徒を対象にした 30 分間のミニ講義であった。そして、第 4 部は、特設ステージでの約 2 時間にわたる Performances であった。第 4 部では、天津師範大学附属中学の生徒・グループによる、中国風の踊り、パレイ、楽器演奏が多数披露された他、同窓生からの祝辞と演技披露があった。特に、プロの歌手による歌の披露と、北京オリンピックで金メダルを獲得した人の祝辞が印象的であった。また、交流学校であるスウェーデンから来た生徒によるパフォーマンスもあった。最後は、オーケストラによる演奏と花火の打ち上げがあり、盛会のうちに記念行事が終わった。中等学校の記念行事としては考えられないようなスケールと内容のある記念行事であった。

その後も、4 日間に渡って、参加した世界の交流校の校長等と親しく交流する時間が与えられ、三重大学教育学部附属中学校による国際交流を広げるきっかけが得られた感があった。



フォーラムで氏が開発された起業家教育プログラムを発表される山根栄次教授。



天津市实验中学創立 85 周年記念式典に招待された各国代表者（一部）とともに。

9月3日(水)と4日(木)、大学院秋学期入学の聴き取り調査及び学生交換に関する協議の会合のため、交流協定校である UNCW (University of North Carolina at Wilmington)を訪問した。

会合には UNCW 側スタッフとしてプロボスト補佐(国際交流担当)である Dr. Denise DiPuccio を始め、交換留学生担当者が3名、第二外国語としての英語教育センター(ESLセンター)責任者、そして三重大に來学したこともあり、1998年以來英語科の遠隔授業の相手方である加納洋子日本語講師が参加した。また、9人の学生と1人の母親とも聴き取り調査及び三重大への交換留学についての会合を持つことが出来た。

スタッフとの学生交換の協議では、前もって作成した三重大留学への説明書、国際交流センターの授業案内及び Summer Program パンフレット、三重大案内、三重県紹介冊子及び三重県地図を配布・提示し、センターの日本語授業、英語による授業、各学部、宿舍、三重大奨学金、生活費、国民健康保険、ホストファミリー、出迎え方法などについて説明した。UNCW からは、三重大に UNCW 生を送る場合、8月中旬に UNCW で秋学期が始まるので前期の派遣がもっとも都合が良いとの発言があった。また、UNCW 生は英語の授業のある大学に行くことを希望しており、それは英語の授業を取るにより4年間での卒業の可能性が高くなるからとのことであった。さらに ESL センターに、個人でもグループでも良いので三重大生を送って欲しいとの要望があった。

学生との会合では、UNCW スタッフに渡したものと同一資料を配布・提示しスタッフへの説明とほぼ同一説明を行った。東京、大阪、名古屋、京都、奈良等に関心があり、安価な交通機関や宿泊場所について説明した。また、資料を使って三重のすばらしさもアピールした。

スタッフ、学生との会合で感じたことは、授業、生活、観光などに関して、金銭面も含め、具体的な情報を求めていることである。UNCW だけでなく、このような情報をこまめにインターネットで公開することが海外からの学生を引きつけることになると思われる。

UNCW に滞在中、DePaolo 学長の家で行われた留学生レセプションに招かれた。留学生への歓迎挨拶の中で学長が「UNCW の教授陣も学生達も留学生から多くのことを学んでいます。希望などあれば私にメールを下さい。」と述べたことが印象に残った。レセプションで三重大からの交換留学生である川北佑奈さん(教育学部英語科4年生)にも会うことができ、総合英語、外国人への英語教授法、ポルトガル語、一般心理学、音楽入門の授業を受け、元気に留学生生活を送っているとのことであった。

また、加納先生の日本語授業、ESL センターの3人の先生の授業を見学した。加納先生の授業は初心者向きのもので、学生は電話番号を伝え合うことによって数字を自然に学んだり、パワーポイントで書き順が何度も自動的に映し出されるカタカナの書き方を



留学生レセプション会場にて。左より：早瀬、留学中の川北佑奈さん、DePaolo 学長、宮地、DiPuccio プロボスト補佐。



練習するなど、大変機能的な授業展開であった。学生は臆することなく質問に答えたり、積極的に発言していた。ESL センターの3つの授業では、それぞれ、学生が自分の家族を紹介し合う、TOEIC に出題される作文の内容をグループで討議する、民主党オバマ大統領候補の政綱宣言書を討議する、という内容で実践に重点が置かれていた。

なお、大学院秋学期入学の聴き取り調査については別の形で報告書を出すことになっている。

学生への留学説明風景。学生からは活発な質問が出された。この説明の後、大学院秋季入学に関するアンケートに記入してもらった。

外国人研究者 李遠方（河南師範大学助教授）

9月13日（土）、中部地区英語教育学会三重支部例会が開催され、河南師範大学からの研究者である李遠方先生が“The Present English Education in China”（中国における英語教育の現状）と題し中国の外国語、英語教育事情について講演をされました。まず、講演に先立ち河南師範大学についても言及され、30年前は6学科あり、約300人の教職員が約2,000人の学生を教育していましたが、現在では18の学部、約2,000人の教職員、20,000人の学生の規模まで発展したとのことでした。講演要旨は次の通りです。

「中国では外国語教育、とりわけ英語教育の重要性が増している。小学校では英語の授業が導入されており、英語を教える幼稚園もでてきている。小学校では独自に教師を雇い、英語学習を希望する児童から特別の授業料を徴収して授業を行っているところもある。又、学校外でも“Cambridge Young Learners English”という制度があり、多くの6才から12才の子どもが勉強している。またこの制度では英語試験も実施しており、この10年間で150万人の子どもが受験した。中等教育においては外国語（英語または日本語が多い）が必修である。英語の場合、生徒の全般的なコミュニケーション能力をつけることが目指され、教師間で「モデル授業」を公開し、教授力を高めている。しかしながら、学年が進行するにつれて高等学校や大学の入学試験の準備を目的とした授業が増してくるのも事実である。大学入試試験は全国20カ所で一斉に行われるが、同一試験ではなく同一レベルのものである。どこの会場で受験しても良く、遠くに移動する受験生もいる。大学に入ると、英語以外の専攻生のほとんどが「大学英语」と呼ばれる週2回90分の科目を2年間履修する。



少数だが他外国語履修者もおり、学士号を得るためにそれぞれの外国語の試験に合格しなければならない。英語専攻生は90分の英語授業が週に6~7回あり、やはり卒業時には英語の試験に合格が義務づけられる。大学を卒業して専門職に就くと、昇進の機会ごとに外国語の試験にも合格しないと昇進できない。例えば大学では、助手、講師、助教授、教授になる前に外国語の試験がある。私は講師昇進時に日本語で、助教授昇進時にフランス語で試験を受けた。さらに医者为例にあげると、研修医、医師、副主任医師、主任医師になる前に同じく外国語の試験がある。このように、中国では外国語、特に英語の能力が生涯の節目に必要とされる。」（文責：早瀬光秋）

中部地区英語教育学会三重支部例会で発表される李先生

留学生便り

My Life and Study in UNCW

英語教育コース4年 川北佑奈

6月下旬に日本を発ってから、はや4ヶ月が過ぎました。私は今、アメリカのUNCWに留学しています。当初は日本が恋しい時もありましたが、今はここでの生活がとても気に入り、毎日充実した日々を送っています。

こちらに来て、まずは4週間のESLプログラムに参加しました。月曜から木曜までは授業に行き、週末は友達とビーチに行ったり映画を見たり、さらにはクラスでワシントンDCへ旅行に行ったりと、非常に濃い一ヶ月を過ごしました。授業では、英語とアメリカ文化を中心に学びました。韓国、ブラジル、中国、トルコ、フランスそして台湾と、いろいろな国の生徒がいたので、彼らの文化についても多く学びました。仲のよい友達が韓国人と



ワシントンDC旅行。前列右から2番目が川北さん。



キャンパスにて。UNCWのキャンパスは広く、教室まで自転車で移動する学生も多い。左から2番目が川北さん。

が増え、今では常に何らかの締め切りを抱えている状態です。

土日は友達やホストファミリーと過ごします。ウィルミントンは三重と似ているところがあり、車がないと買い物にも行けません。幸い、大抵の学生が車を持っているので、留学生は彼らに頼っています。ウィルミントンは都会ではありませんが、美しいビーチが3ヶ所もあり、9月いっぱいまでは泳ぐこともできます。また、ダウンタウンでは古きよき町並みが見られ、週末の夜にはバーやクラブに来る若者でにぎわいます。ちなみに、アメリカでは飲酒は21歳になってからです。

アメリカ人の学生達の間にはすでに仲の良いグループが出来上がっており、自分から友達を作るのはなかなか難しいですが、Conversation PartnerやMentorといったプログラムがあるので、すぐに友達ができました。また、学内では「日本人？」と声をかけられることもあります。ただ、“Are you Korean?”と言われる確率のほうが高いです。



日本語チューターで仲良くなった友達と。間に立って二人の肩を抱くキャラクターはUNCWのマスコット Seahawk。

ブラジル人だったので、このふたつの国には特に興味を持つようになりました。ESL終了後は、韓国人の友達数人とニューヨークへ旅行にも行きました。ESLの友達とは今でも連絡を取り合っています。

8月下旬からは新学期が始まり、キャンパスにも学生が戻って来、新入生や新たな留学生もたくさんやって来ました。月曜から金曜までは毎日授業があります。留学生は基本的には専攻に関係なく、どんな授業でも選べます。私は英語、教育、音楽、ポルトガル語の4つの授業を選択しました。英語のクラスは留学生向けで、会話で使えるイディオムを習ったり、母国についてのプレゼンをしたりします。教育の授業では、英語を第二言語とする生徒の教育について勉強します。クラスには実際に教師をしている人達が生徒として参加しているので、アメリカの教育事情について知ることができ、大変勉強になります。授業中は英語の聞き取りに全力を注ぎます。それでも、生徒の発言は早すぎて聞き取れないときがあります。特に、教授のジョークが一人だけ理解できなかったときはとても悲しくなります。初めのうちは思っていたほど忙しくなかったのですが、学期が進むにつれ急に課題やテスト



川北さんが住んでいる international house。木立に囲まれた赤レンガづくりの建物。

キャンパスはとても広大で美しく、野生のリスマも多く見られます。学内にはたくさんのアパートや寮があり、多くの学生が暮らしています。私が住んでいるインターナショナルハウスは留学生が多く、いろんな国の友達と毎日楽しく生活しています。また、殆どの留学生がISO(International Students Organization)というサークルに参加しています。毎週日曜日には各国のプレゼンがあり、他にもさまざまなイベントが行われます。私達日本人グループは日本の主要都市の紹介をしました。広島を紹介の際に千羽鶴(200羽)を見せたところ、その精密さに驚かれました。

最近、日本語のチューターも始めました。週に5回、日本語を勉強している学生の会話練習の相手をしたり、欠席した授業の復習を手伝ったりしています。このように、チューターやESLの経験を通し、その言語を本当に学びたいと思っている人達への言語教育に大変関心を持つようになりました。

留学生活も残すところあと一か月半となりましたが、悔いのないよう、一日一日を大切に過ごしたいと思います。

○ 南開大学留学記 ○

三重大学教育学部卒業生 高橋 愛
(人間発達科学課程 54 期生)

報告が遅くなりましたが、9月1日に無事天津に到着しました！空港から大学までは、まず南京路までバスで行き、そこからタクシーで行きました。

現在、公費留学生が中心に住む誼園2号楼にドイツ人のルームメイトと一緒に住んでいます。空調の温度で合わないこと(涼しい日も冷房が強く効いています…)以外はとてもいい女の子です。部屋は狭い割に二人部屋で一人一日50元かかるので、自費留学生は、みんな外に住みたいと言っています。私も一人の時間がほしかったり、部屋の狭さなどに不満があったりなどなのですが、安全面や仲間とすぐ会えること、そして何より寮費が免除なので、私はこの先も寮生活の予定です。

先日クラス分けテストがありました。さっぱり分からず、最後は作文まであって四苦八苦でした。初級の一番下から始められたら…と思っていたのですが、クラス分けの結果はなんと中級2班でした。中級は2レベルあり、中級2班は高級の1段階下です。教科書は、さすが南開大学と言いますか、大学が独自に編纂した教科書と、おなじみの「橋梁(下)」などです。見る限り私のレベルではありません。初日は何とか頑張りましたが、やはり私には橋梁(下)は早すぎました。別世界です。本当は初級からやるべきレベルなのですが、1つ下げた中級1班が大変きめ細かい授業内容なので大変ですが、そこで頑張っていこうと思います。ちなみに、中級1班の教科書はすべて大学が編纂したものです。

南開大学の授業は大変興味深い内容です。まず前半は20人強の大班で、先生が精読の語法や単語の使い分けをパワーポイントで説明していきます。よく穴埋めになっているので、みんな答えていきます。後半は10人強の小班になり、聴力か口語をやっていきます。大班で学習した単語を翌日の小班でまず最初に聴写します。精読と口語と聴力の教科書で出てくる表現は、それぞれ被っています。精読で覚えた表現を口語の時間に使って表現したり、それが聴力の文章に出てくることがあります。つまり、授業内容が連動しているのです。私はまだペースがつかめず、毎日の予習復習、宿題でいっぱいになってしましますが、ペースをつかめたら私も少しは力が伸びるのではないかなと期待しています。もちろん、自分自身の努力あってこそなのですが…。

感動したのは1週間の授業計画がすでに立てられていることです。ある日は精読と聴力という教科書だけではなく、精読のこの部分の表現を覚えるという細かい設定があります。宿題は宿題ノートのここからここまでを解くと指定があるので、どこが大切な点か認識しやすいです(学習計画はプリントで配られました)。本当にきめ細かいです。宿題は毎日提出しますが、先生

が丁寧に添削してくださいませ。自分のどこが特に弱いのか少しずつわかってきました。ただ、中級1班はスパルタだそうで、予習と復習と宿題で半日つぶれます。なので、月曜から木曜まではあまり外に出歩けません。

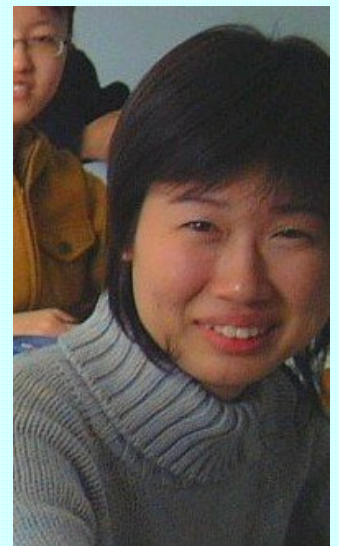
南開大学は三重大学よりもはるかに広いように感じます。毎日、果物を買うついでに散歩するのが楽しいです。学内の道端にはたくさんのくだもの屋さんがあって、今日はバナナを買ったときに果物の量詞を教えてもらいました。大きなスーパーで買うこともありますが、こういう小さな商店でいろいろ話をするのが好きです。

天津の人はおしゃべり好きで親切な印象があります。スーパーで買い物をしているだけで話しかけられることもあり、なかなか言葉が出ず苦勞していると、相手も何とかしてやるよ！という感じでがんばってくれます。また、見知らぬ人にもよく話しかけられます。緑が多く、噴水や池もたくさんあることに感動しました。夜の噴水のライトアップは本当にきれいです。天津大学にも遊びに行きましたが、どちらもとても広く、さすが天津で有名な大学だと思いました。

欠点と言えば、日本人が多すぎるので、日本人で固まりやすくなってしまいます。天津師範大学とは比べものにならないほど日本人がいます。心がけてこれはメリットにもなっているのですが…。現にホームシックにならず助かっています。

先週、佐藤耕平くん(三重大学教育学部出身)と加藤真生さん(三重大学人文学部学生)に会いました(二人とも天津師範大学語学研修に参加した経験あり)。もう二人とも大先輩という感じで、私は頼りっきりになってしまったので、必死に勉強しなければ！と刺激されました。また、彼らだけでなく、伊藤先生などいろいろな方に私の留学の話が伝わっているようで、気にかけていただいて本当に幸せ者だと思います。ありがとうございます。

出来事を走り書きしたような内容ですみません。それでは、失礼します。



第一回天津師範大学語学研修に参加した頃の高橋愛さん。

河南師範大学留学生来学

去る9月26日、河南師範大学から第3回交換留学生を教育学部に迎えました。張琳琳(日本語読み: チョウ リンリン)さん、張楚含(チョウ ソガン)さん、そして趙項毅(チョウ コウキ)君の3人で、指導教員はそれぞれ須曾野仁志先生、丹保健一先

生、宮地信弘先生です。3人は、現在留学生会館で暮らしており、授業は、国際交流センターで開講されている日本語の授業と教育学部における専門の授業を受講しています。日本に来て1ヶ月半ほど経ち、ホームシックもやっと少しずつ薄らいできたようです。これから来年の帰国時まで三重大学での経験を通して日本について多くのことを学んでほしいと思います。

10月29日には、襄樊学院外国語学部からの研究員・劉東先生もお招きして、大学前のピュア菜で3人の河南師範大学生と劉先生の歓迎会を催しました。写真はその時の様子です。



ピュア菜で行われた有志による歓迎会。山田学部長も駆けつけてくださり、楽しいひと時となりました。



ピュア菜で餅つき初体験の張琳琳さん。それを眺めるのは研究員の劉東先生と張楚含さん。↑ 劉東先生と趙項毅君。→



学生海外活動

Tri-U IJSS

Tri-University International Joint Seminar & Symposium

第15回3大学国際ジョイント セミナー&シンポジウム開催

第15回3大学国際ジョイントセミナー&シンポジウムが江蘇大学で10月20日から23日まで開催されました。これは、三重大学、チェンマイ大学(タイ)、江蘇大学(中国)がホスト校となって毎年秋に実施している学生による研究発表中心の国際交流企画です。「世界におけるアジアの役割」(Role of Asia in the World)というテーマを中核として、「人口」、「食料」、「エネルギー」、「環境」という今日的なトピックのもとに英語による研究発表を行います。今年はその4つの主要トピックに開催校の江蘇大学が設定したEcological Developmentが加わりました。英語による研究発表のほか、文化交流行事や風力発電設備生産工場などへのエクスクーションも行われました。来年度



会場となった江蘇大会議センター。この建物の2室で4日間にわたって各国学生の研究発表と活発な質疑応答が行われました。



は三重大学で開催されます。

三重大学からは学生13名と学長を含めた実行委員11名(教員10名・職員1名)の計24名が参加しました。参加学生13名のうち2名は教育学研究科の学生で、以下のタイトルで研究発表を行いました。▲

パワーポイントを使って英語での研究発表と活発な質疑応答。



▼ 鏡 愛 (教育学研究科学校教育専修2年) :

Storytelling for Children to Learn about the Environment and Living in an Eco-friendly Way

国 平 (教育学研究科英語教育専修2年) :

A Contrastive Analysis on Environmental Issues Reported in the Asahi and Chunichi Newspapers of Japan

開催3日目の親睦パーティーで三重大学生が披露した「よさこいソーラン」のパフォーマンス。迫力があり、好評でした。



シアトルパシフィック大学春期語学研修参加者募集

研修期間：平成21年2月11日(水) - 3月22日(日)
 研修場所：シアトルパシフィック大学校舎及び周辺地域等
 募集期間：平成20年10月31日(金) - 11月28日(金)
 参加費用：約417,000円(変更される場合もあり)
 問合せ先：花見教授または吉井教授(国際交流センター)

第10回タスマニア大学語学研修参加者募集

研修期間：平成21年2月14日(土) - 3月14日(土)
 研修場所：タスマニア大学校舎及び周辺地域等
 募集期間：平成20年10月31日(金) - 11月28日(金)
 参加費用：約455,000円(変更される場合もあり)
 問合せ先：花見教授または吉井教授(国際交流センター)

編集部から

天津師範大学との合作弁学プログラムの本格実施に伴い、いよいよ来年(2009年)春に天津師範大学から21名の留学生を教育学部に迎えます。その時を前にして、あらためて合作弁学プログラムについて教授会の皆様により詳しく知っていただければという気持ちから今回の「国際交流ニューズレター」を「合作弁学プログラム特集号」としました。皆様の忌憚のないご意見等をお寄せいただければ幸いです。